（書式２）

＜事務局使用欄＞**受付番号：**　　－

「２０２３年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部２年　石井　睦久

私はこれまで海外に行ったことがなかった。そのため、留学に対する感覚は、言語や文化の違いという大きな困難に孤独に挑戦すること、といったイメージが強く、恐れて敬遠する物だった。そんな性格だったため、今回のプログラムの、多人数合同、短期間、しかも日本語で交流するといった内容は、まさに渡りに船だった。このシステムだったからこそ、私はこれまで躊躇してきた海外留学ができたのだと思う。実際に行ってみると、海外の学生はどの人もとてもコミュニケーションに積極的で優しく、またこちらと真摯に話そうとしてくれた。さらに、日本を研究する学科の人たちというのもあって、こちらの文化、言語についてとても興味を持ってくれていた。そのため、話題が作りやすく会話が捗り、また反問する形でベトナムのことを良く知ることができた。これもこのプログラムならではのことだと思う。このプログラムで得たものは多かった。まず一つとして、最初に述べた通り留学に対する意識の変化というものがある。それまでのハードルが高いものという印象から、ある程度ポジティブに臨めるものといった印象に変化した。より身近になったともいえる。最大の変化は、ある程度飛び込むような感覚で行ったとしても、手探りの中で本質的なコミュニケーションを取ることができるということに気づけたことにあると思う。大学での学習について、私が京大で専攻している分野は日本文学なので、このプログラムでその分野に関する収穫があったかと言われると答えに窮する。しかし彼らの日本の学習に対しての熱意に触れて、エネルギーを注いで研究をすることの意義を再確認できた。特に印象に残ったのは、奇しくも私と同じ日本文学を研究していた生徒の事である。彼女は多くの日本の小説を読み、こちらが顔負けになるほどの知識を持って日本文学の話をしてくれた。「好き」という気持ちが持つエネルギーの大きさについて、改めて驚かされた。しかし、なんといっても最大の変化は、私の中でコミュニケーションに積極的に挑もうという気持ちが芽生えたことだ。私は近頃鬱鬱とした生活が続き、人付き合いに自信を失くしていた。しかし、改めて私の中に他人に対してのポジティブな気持ちがあったことを知れて、生きる気力を取り戻すことができた。今後は一人で、長期間での留学にも挑戦できそうだ。また、海外で、ベトナム学生との経験も多くあった。特に、ベトナム学生に連れられて旧市街を回り、一緒に列車を観たことは忘れがたい。プログラム全体に関しては、今後も期間や形態を変えないまま、私のような学生の受け皿になってほしいという想いが一番強い。進路に関しては、海外から観たことでより日本文化に対する関心が高まった。そのため、今度は日本を真に客観視しながら進路を選んでいきたいと思う。